

巻頭言

野球渡来150年

ノンフィクション作家

佐山 和夫



日本に野球が渡来してきて、今年がちょうど150年だということで、各地でいろんな行事が行われている。

150年前の1872年といえば、まだ明治もホヤホヤの5年目。伝えられた場所というのが、東京大学のルーツ校の一つ、当時の「第一大学区第一番中学校」だった。神田神保町駅の近く、今では、学士会館のある辺りにあった。

野球を教えてくれた先生にも何人かいたようだが、アメリカ人教師ホーレス・ウィルソン先生がもっとも早かったようだ。

彼は前年の明治四年八月に来日していて、数学や英語、その他を担当していたというが、その彼がどうして野球を——という疑問には、明白な解答がある。彼は日本の学生たちが行儀よく勤勉で、教えやすいことを喜びながらも、彼らの体格が貧弱で、体力に問題がありそうなことを気にしていた。部屋にこもって国の将来について議論などを熱心にするのはいいが、それよりも、まずは彼らには健康で、強靱な身体をもってもらいたいと思ったのだ。それがあってこそその国家百年の大計ではないか。

ウィルソン先生は、学生たちを教室や寮の部

屋から外に引っぱり出すことがまず必要だと考え、その方法をさぐった。ともかく学生たちには、余暇には屋外に出て身体を動かすことを促したい。それには何がいかと考えた末に思いついたのが、南北戦争への従軍中に覚えたベースボールだった。戦地においても、実戦のないときには、兵士たちはそのニューヨーク生まれの新しいスポーツに熱中したのだ。

ウィルソン先生が東京の学生たちに示したのは、本格的なベースボールだったわけではない。彼はただボールを空に打ち放って、学生たちにそれを捕れといただけである。しかし、学生たちにはこれが大受け。先生も楽しかったろうが、生徒も夢中になった。

当時の学生の一人（「好学生」）が書き残している新聞記事に、こうある。

「今（筆者注、明治二九年）の高等商業学校のところに南校という学校あり。明治五年のころは、第一大学区第一番中学と名付けて、唯一の洋学校なりしが、英語歴史などを教うるウィルソンといえる米国人あり。

この人、つねに球技を好み、体操場に出ては

バットをもちて球を打ち、余輩にこれを取らせて無上の喜びとせしが・・・」

楽しくやれば、当然技量も大いに伸びて、やがてはゲーム形式での対戦へと発展したことも、そのあとに読める。

「いつとなく、余輩の球戯も上達し、打球は中空をかすめて運動場の辺隔より構外へ出るほどの勢いを示せしが、ついに本式にベースを置き、組を分かちて、野球の技を始むるに至れり。

されど、はじめの事、その業の見るべきほどの事もなかりしが、明治七年、八年に至りては非常に発達し、ついにある人の紹介によりて、横浜の米国人と試合をなしたる事も度々なりし。八、九年のころには球技盛んに流行し、見物人も山をなして、外人と戦う時などには非常の人気なりし・・・」

その最初の手ほどきを教えてくれたのがホーレス・ウィルソン先生だとはわかっていたが、どんな素性の人なのか、どうして日本に来たのかを知りたいと私は思った。しかし、不思議にも、よくは知られていなかった。

そこで私は彼の出身地とされるメイン州のゴーラム村の一带にも配布されている新聞『ポートランド・プレス・ヘラルド』紙に手紙を書いた。彼の子孫、あるいは彼のことを知る人がいるなら、是非知らせてほしいと頼んだのだ。二十一世紀がもう間近まで迫っていたころだった。

しばらくののち、「ホーレス・ウィルソンの実家の者では、当方のみが元のまま、家業の牧畜を営んでいます」という返事が来たので、私は飛んで行ったのだった。

ウィルソン家には十人の子供がいたというが、家業を継いでいたのは末弟エルブリッジの孫たち。長男も、次男のホーレスも、南北戦争が終わったあとは、サンフランシスコに住みつき、実家には戻らなかった。

「まあ、そうでしたか。ホーレス伯父さんが六年ほど日本へ行っていたことは知っていましたが、日本人に初めて野球を教えたとは、知りませんでした」と、エルブリッジの孫のパトリアシアさん。「ああ、もっと早く知っていたら、私の母にも伝えられたのに。母は野球が大好きでしたから、きっと喜んだでしょうに・・・」とあって、涙した。

パトリアシアさんもその当時にしてすでに相当な高齢であられたが、野球のことには精通しておられ、日本のそのレベルの高さにも関心が深かった。

「本当にうちのホーレス伯父が日本での野球事始めに貢献していたのか」と何度も念を押すので、私は先に示した文献など具体的に説明して、やっと理解して頂いたというわけだった。

ただし、ホーレス・ウィルソン先生ご本人は、きっとこういわれるのではないかと。

「いや、私は特にベースボールを教えようとしたのではなかったのですよ。ただ、学生たちには、将来のために、もっと身体を強くしてもらいたかっただけです。野球を教えたなどは、とんでもない。学生諸君がもっとゲームのことを知りたいというから、聞かれるままに答えただけです。彼らが自分たちで今の日本野球の基礎を作ったのですよ」と。

しかしながら、大谷翔平選手や佐々木朗希投手の出現には、さぞかし驚いておられるのではないかと。

